

れている。石室内には仿製三角縁神獸鏡四面・碧玉製腕飾り一一点のほか鏡三面・刀剣・玉類などが副葬され、四世紀末ごろの築造と考えられている。このほか、福岡市鋤先古墳の石室(第56図)も初期段階の竪穴系横口式石室であり、築造時期は五世紀初頭ごろと考えられている。床面は長さ三・四^{メートル}、幅二・五^{メートル}を内側に強く持ち送りながら小口積みし、石室と外部の羨道の間には一枚石を立てて閉塞している。このように、竪穴系横口式石室の特徴は、竪穴式石室の短辺の一方に開口部と通路を設けることにより、一石室内に複数の埋葬が可能になったことである。また、その起源は朝鮮半島中部のピョンヤンの四世紀中ごろの古墳にさかのぼることができると思われる。また、下って南部のソウル周辺の古墳にも採用されているという。

五世紀後半代にはこの型式の石室は北部九州各地の首長墓に取り入れられる。構造も石室の最下部の壁石が大きくなり、羨道の両側壁に大形の立石を使用するなど、全体として堅固な作りになっていく。六世紀初頭には、羨道がしだいに長くなり、横穴式石室に変化していく。更に六世紀中ごろになると玄室の手前前面を設ける、複室構造の横穴式石室が現れ、石室の長大化が一層進むことになる。

三 後期・終末期の北部九州

在地豪族の変容

五世紀代に直轄地として設置された「県」を拠り所とする豪族は、大和政権内の地方官である「県主」として、在地首長の権限を認められていた。その後六世紀代には、新し

く地方の支配機構として国造制が導入される。北部九州では豊直・菟狹(宇佐)公・国前臣・宗形君・筑紫君などが国造となつている(第57図)。大和政権下の氏姓制度では、地方豪族には君・造・首・直・史などの姓が与えられるが、北部九州の豪族は、支配地域に対して強い権限を伴う自立性の高い君(公)姓が多い。

このように、六世紀初めごろには大和政権による九州の支配体制が完了する。この時期国内的には継体天皇の即位をめぐつて、政権内部の混乱が続き、対外的にも朝鮮半島南部に確保していた勢力地盤である加羅(任那)の四県が継体六年(五二二)に百済に割譲されるという事態が発生していた。北部九州の豪族は、五世紀代から大和政権の朝鮮半島進出に際して、先兵として徴用されるときも物資の輸送などの負担も強いられていた。このような状況下、筑紫君磐井の乱は継体二十一年(五二七)六月、朝鮮半島の情勢に大和政権が敏感に反応し、近江毛野臣が六万の兵を率いて朝鮮半島に派兵しようとしたことに端を発する。新羅はこれを察知して、北部九州に勢力基盤を持っていた筑紫君磐井に贈り物をして、近江毛野臣が率いる大和政権軍を阻止するよう依頼した。これを受けた筑紫君磐井は大和政権に戦いを宣言した。継体二十二年(五二八)十一月戦いに敗れた筑紫君磐井の墓として、八女市岩戸山古墳が比定されている。岩戸山古墳は前方後円墳で周溝や外堤をめぐらし、周堤に接して一辺四六メートルの方形の「別区」が造られている。墳長一三二メートル、周溝や外堤まで含めると全長一八〇メートルの九州最大の前方後円墳である。この古墳とはほぼ時を同じくして、桂川町天神山古墳・飯塚市寺山古墳・勝山町扇八幡古墳・北九州市小倉南区荒神森古墳が築造される。これらの古墳はそれぞれの首長系列のなかで以前より大規模になっている。しかも周溝や外堤をめぐらすなど目

を引く存在である。さらに、大和政権の直轄地として征服地に設置された屯倉みやけの所在地にもかかわらず首長墓は大型になっている。ここには筑紫君磐井に勝利したものの、在地首長層に対してはその権力を認めざるを得なかった大和政権と筑紫の政治的状况を反映しているのではあるまいか。六世紀中ごろ首長墓が大きくなり周溝をもつ傾向は、けっして屯倉設置地区だけではなく宗像郡・伊都郡など北部九州では広くみられる。なお、この乱の後、安閑二年(五三五)に関東から九州にかけて二六か所に大和政権の直轄地である屯倉が設置される。北部九州には豊前国内の膝崎・大抜・肝等・我鹿・桑原、筑前国でも穂波・鎌・糟屋・那ノ津に屯倉が置かれ、支配の強化が図られた(第57図)。

後期の主要古墳

六世紀代の主要古墳には、豊前国の行橋市八雷古墳(全長約八〇メートル)・勝山町庄屋塚古墳(推定全長約九〇メートル)・同町扇八幡古墳(全長五八・八メートル)、筑前国では王塚古墳(推定全長約八六メートル)、筑後国では甘木市鬼の枕古墳(全長五六メートル)・吉井町日の岡古墳(全長約八五メートル)・八女市岩戸山古墳(全長約一三八メートル、第58図)などの前方後円墳がある。

六世紀末から七世紀前半の時期では、豊前国の勝山町綾塚古墳(径約四一メートル)・同町橋塚古墳(径約四〇メートル)・豊津町甲塚方墳(全長四六・五メートル)、筑前国の津屋崎町宮地嶽古墳(径約三四メートル)などの円墳・方墳が築造されている。また、この時期の古墳の内部主体は、大部分が横穴式石室で、中葉以降複室構造の横穴式石室が急増する。

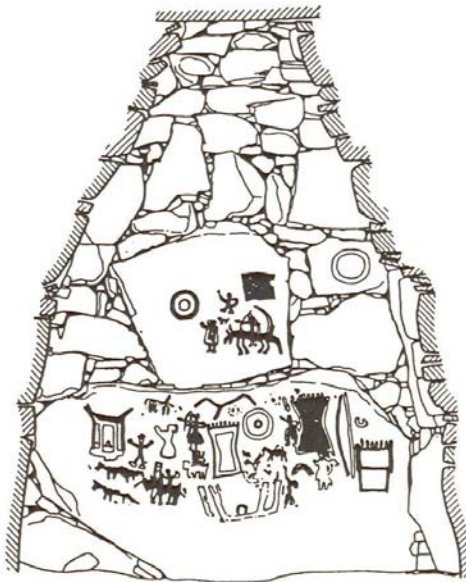
五、六世紀代に石室壁面や石棺に浮き彫りや線刻・彩色などを施す装飾古墳は、北部から中部九州の古墳文化の特徴である。五世紀後半では有明海や不知火海沿岸の石人山古墳・熊本県嘉島町井寺古墳などがある。

横口式家形石棺や障柵式石室に直弧文・同心円文などを描き、彩色する場合が多い。六世紀中葉の日の岡古墳では、奥壁に赤や青・白で巨大な同心円文と蕨手文のほか大刀・盾・靱などの武器や武具類が描かれている。筑後川流域では、ほかに吉井町珍敷塚古墳・同町鳥船塚古墳がある。遠賀川流域の王塚古墳は六世紀中葉に属する装飾古墳の最高傑作といわれ、円文・三角文・蕨手文・双脚輪状文などの幾何学文で壁面を彩り、靱・盾・弓と大刀のほか、袖石には五頭の馬と乗馬した人物を描いている。装飾古墳はほかにも筑紫野市五郎山古墳(第59図)・若宮町竹原古墳などがよく知られている。

また、筑後・肥前・肥後・豊後などの五世紀から六世紀の古墳では、阿蘇溶結凝灰岩を加工した石人・石馬と呼ばれる彫刻が墳丘に立てられることがある。石人山古墳や岩戸山古墳がその代表的な例で、人物(武装・裸体)、動物(馬・猪?・犬?・鶏・水鳥)、器財(盾・靱・刀・蓋・鬘)などがある。

各種の生産遺跡

古墳時代には大和政権や有力な地方豪族の経済力と技術力を背景に、高級消費財や、日常生活の各種道具や消耗品が、専門的集団によって生産されている。このうち、北部九州では須恵器や塩・鉄などの生産遺跡が確認されている。



第59図 筑紫野市五郎山古墳石室壁画実測図

須恵器は、当地方でも五世紀前半の国内でも最も古い時期から生産され始めている。須恵器を焼成する窯は「登り窯」と呼ばれる宍窯で、六世紀後半になると継続的に多量生産されるため、窯跡が群集するようになる。五世紀代の遺跡では、福岡市新開窯跡・夜須町小隈窯跡・豊津町居屋敷遺跡などがある。これらの遺跡は短期間で衰退し、窯の数も五基以下にとどまっている。六世紀後半には大野城市・春日市・太宰府市にまたがる九州最大の牛頸窯跡群で生産が開始され、北九州市天観寺山窯跡群・中津市伊藤田窯跡群・八女窯跡群などの大規模な窯跡群が各地に形成される。これらの窯跡群では七世紀以降も須恵器の生産が続けられる。一方、豊前国内では築城町船迫地区の窯跡群や大平村友枝窯跡のように、古墳時代終末から奈良時代にかけて須恵器以外に古代寺院の瓦を生産する地方窯もある。

製塩土器は古墳時代には北部九州でも周防灘や別府湾・玄界灘・八代湾などの沿岸のほか、内陸部でも多く発見されている。近隣では、北九州市の黒崎貝塚・浜田遺跡・亀ヶ首遺跡などで発見されている。しかし、製塩を行った遺跡となると八代湾にやや集中する以外、全体的に少ない。福岡県内では福岡市今山下遺跡・同市海の中道遺跡が調査によって明らかな製塩遺跡である。今山下遺跡での生産は四世紀前半から五世紀前半ごろまでの時期幅が想定されており、土器の量からみて「自家消費的な家内生産」と考えられている。古墳時代の製鉄に伴う炉が盛んに作られるのは六世紀後半代で、吉備地方において数多く発見されている。北部九州では岡垣町瀬戸遺跡・築城町松丸F遺跡などで製鉄炉跡が調査されている。瀬戸遺跡の製鉄炉跡は六世紀中ごろのもので、鉄滓の分析の結果、磁鉄鉱を原料としている。また、松丸F遺跡は七世紀初頭から七世紀末まで継続し、炉跡と燃料の炭焼き窯跡が確認され、砂鉄を原料とした製鉄炉である。